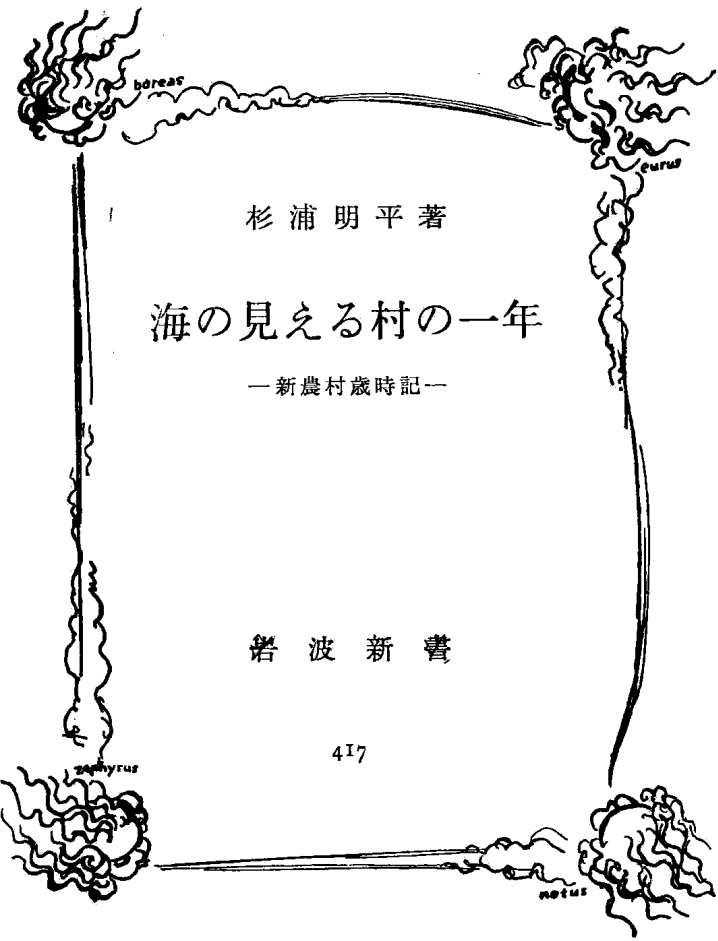
杉浦明平著

海の見える村の一年

—新農村歳時記—

岩波新書

417



杉浦明平著

海の見える村の一年

—新農村歳時記—

岩波新書

417

杉浦明平

1913年愛知に生まれる
1936年東大文学部国文学科卒業
専攻—日本文学，イタリア文学
現在—著述業
著書—「ノリソダ騒動記」「ルネッサンス文学の研究」「台風十三号始末記」「田舎の文化・田舎の政治」

海の見える村の一年　　岩波新書(青版) 417

1961年5月29日　第1刷発行 ©

¥ 130.

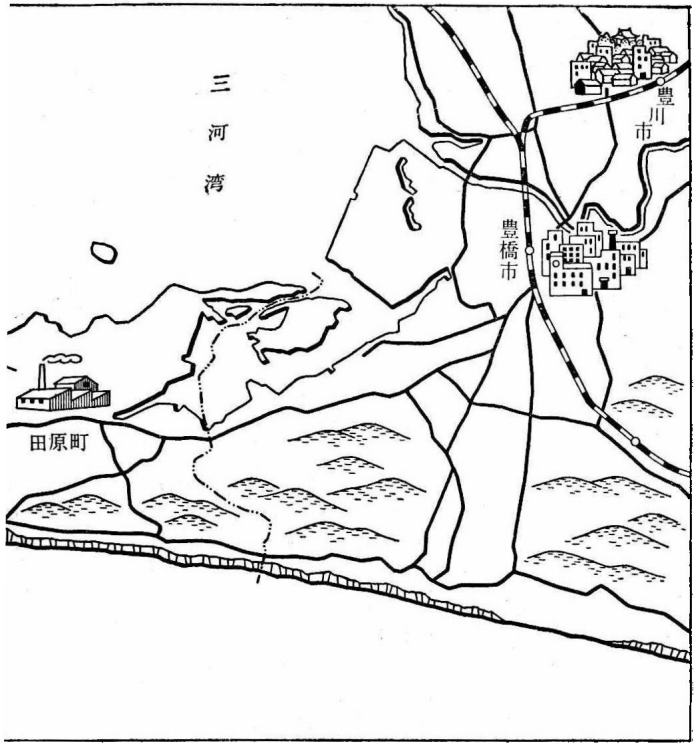
著者　杉浦明平（すぎうらみんぺい）

東京都千代田区神田一ツ橋2—3
発行者　岩波雄二郎

東京都青梅市根ケ布385
印刷者　山田一雄

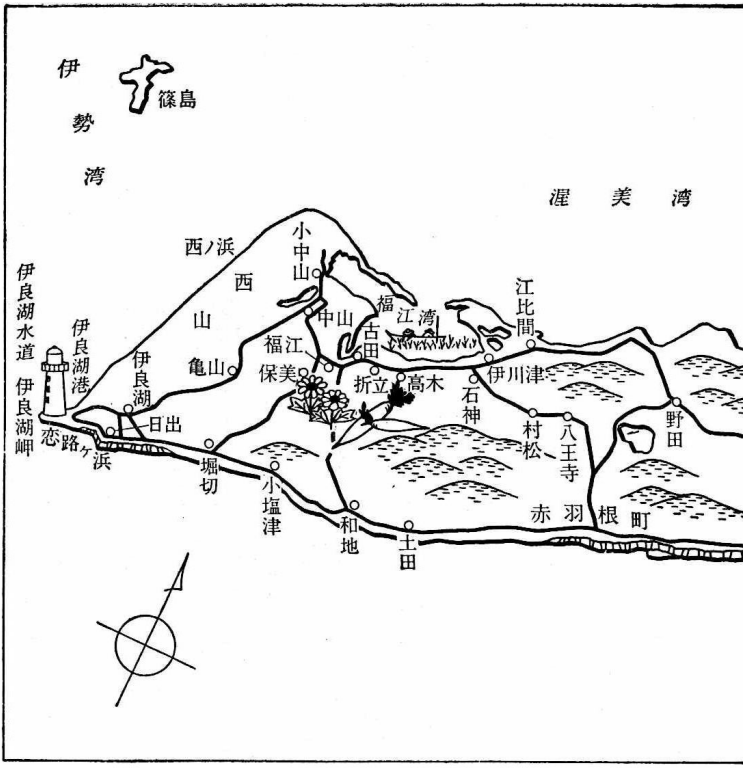
発行所　東京都千代田区神田一ツ橋2—3　株式会社　岩波書店

落丁本・乱丁本はお取替いたします　　精興社印刷・田中製本



3月	132
2月	120
1月	93
12月	70
11月	50
10月	38
9月	10
8月15日以後	1

*



4月……154
5月……178
6月……200
7月……212
8月……242
付録一　渥美町……253
付録二　農民の一日……263
あとがき……269

*

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

8月15日以後

敗戦から十四年たったことになる。が、この町じゅうどこにも敗戦を思いだすよすが一つ見あたらない。ただ、明日から旧盆がはじまる。その準備でいそがしいだけだ。戦前は、農家の支払いは、一年のうち、旧盆前と旧大晦日の二回に限られていたから、お盆の前日は商人は掛け取りに汗だくでかけまわったものだ。今でも農家の支払いは月々ではない、が、米とか薯とか麦とかキャベツとか大口の収入のあった時払いである。ただし、建具屋、ブリキ屋、大工、左官への支払いは、今でも、盆、正月ときめているものが少なくない。だから、そういう職人は八月十五日一日じゅう軽二輪で町じゅうを走りまわっている。

百姓もお盆三日間は畑に出られないので、苗床のキャベツを仮苗床へ移植するのに追われている。九月中旬までに中苗に育てなくてはならないのだ。

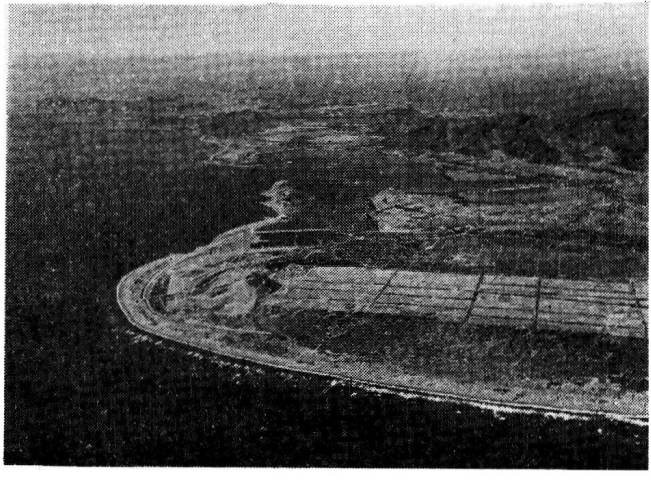
トマトの出荷も今日が最後である。二〇キロ入りの木箱につめて協同経営工場前の道端に積んであるトマトは、末なり

で、崩れんばかりに熟しすぎている。このトマトは、Aトマト会社の小坂井工場へ運ばれてケチャップになる。町の農協が会社と契約した出荷量は二〇万貫だったが、じっさいに出荷されたのは二七万貫に達した。市場向けのトマトは最盛期にはいると、貫代一〇円を割ることさえおこるけれど、ケチャップ用は二九円(二等品一九円)と安定しているので、安心してつくれる。

トマト畑は、すがれて黒っぽく、とりのこされた実だけが赤く目につく。スイカ畑も、蔓があがって小さな青い玉がごろごろころがっている。アワ畑だけはやや黄ばみはじめた。

女たちは薯畑のササゲをぬきとって茎のまま背負って帰っていく。大いそぎで豆をそろえて、お盆の汁粉やあんころ餅につくるにちがいない。

薯畑でも早掘り種(ニシキイモ、高系十四号)の



空から見た福江湾(中部日本新聞社提供)

福江の町

畑はすでに半分以上掘りとられて、白くかわいた土が口をあけている。薯も今日じゅうに出荷しないと、三、四日おくれるうちに、値くずれする危険がある。夕方おそくまで、蔓をあげ、牛を追って、掘りつづけるのが見られた。

旧盆(七月十三、十四、十五の三日)は、今年は八月十六日から十八日までだ。十五日の午後は、都会から着飾った娘やアロハにパナマ帽をかぶった息子たちがぞろぞろ満員のバスから押しだされて、それぞれの実家に散っていく。

その若い男女があくる日には扇をもって小学校に集ってくる。校舎の中でも畳敷きの裁縫室や礼法室は、何年ぶりかで顔を合わせる同級生で溢れている。仕出し屋が魚の盛合せ料理の皿を運んでくると、ビールがぬかれて乾杯される。女でもコップに一ぱいくらい飲まぬものは少ない。そして余興がはじまる。もっとも二十歳を

こえた連中のクラス会は、小学校ではなくて、角上、井筒万、ヨカローなどの料理屋である。

中山と小中山には盆踊りが催される。その村の青年たちがおどるだけではない。どこの村の若衆も、都会から帰省した青年も、日がくれると、みんなりゅうとした服装に慎太郎刈りをなでつけたうえ、オートバイを中山へ飛ばしていく。娘を尻にのせて走る車もある。

十六、十七の二晩は、月が出る。踊りは夜明けまでつづく。青年たちはふらふらになって朝帰りする。

だが、このお盆のさいちゅうでも、ノリの組合員は朝からかりだされる。

「東組のかたに申しあげます。明日午前十時までに朝鮮堤防に集ってください。ノリ漁場の区割りをいたします。来ないものは権利抛棄したものと見なします」

お盆の大売り出し

と部落放送が叫びつづけている。お盆に海に入ると、盆鮫に食われるというのに、朝っぱらから裸で海の中に杭を打ってまわるのである。

だから三日のお盆がすぎると、連日、部落放送は一そうやかましい。

「原西組のみなさん、ノリの竹がまいりました。会館前でわけますから、注文したかたはとりにきてください」

「里組のみなさん、竹がきました。お宮で分けますから集ってください」

村を散歩すると、木蔭や土間の涼しいところで女はノリの簀をあんでいるし、男は竹を割っている。手に竹割器をはめて力をこめると、青竹は四つなり六つなりに裂けてしまう。男の子は中学二年生になると、この竹割りをやらされる。ちょうど夏休みだから、おやじが区割りで海にいっているあいだ、子供が竹を割っている。全村がノリに従事している折立や伊川津では、いたるところでパチパチと音がして、花火でもあげてるようだ。

「小中山じゃ、今年一戸平均一八万円もノリであげたげいな。今年は青ノリの値もよかったでのん。来年はどうずら」

「来年もよさそうだね。李承晩がつづくかぎり、朝鮮ノリは輸入されないで、だいじょうぶさ。南鮮と仲よくなったら、一〇億枚からのノリが入ってくる、こいつは大ごとだぜ」

*

お盆がすんだ十九日には、稲刈りがはじまった。特殊早植に変ったから、もう実ったのである。炎天の下で、月末まで稲刈りがつづく。今年はじめて鎌のかわりに、長い柄の先にV字型の刃をつけた新式の稲刈機が登場した。柄が長いので背骨を折りまげずにすむ。V字の刃を株にあてて押せば刈れるわけで、正条植だから、一押しで一〇株刈り取れる。鎌なら三人一日かかった一反歩(約一〇アール)の田んぼが一人で四時間半でかたづくという宣伝だ。

キャベツ苗の仮移植もつづいているし、玉ネギの種も配給される。台風七号でこわれた町道を修理するために、四日間もお役(勤労奉仕)に狩り出される。稲や薯の取り入れ、キャベツの植付け、大根まきのために、今のうちに道を直しておかぬと、牛車やオート三輪が通行できなくなるからである。

そういえば、青シソを何反も栽培している畑がある。その青シソの葉も、いまが、取り入れどきで、一反で三〇〇貫ずつ摘んで、これを塩もみにしたうえ、T漬物会社へ出す。特約しているのである。

二十日に大根の種まきをしている爺さんがあったので、質問したら、

「これはカブの代用品だぞね。今からまいてうんとふとらせて一本一貫目もある大根をつくる。うまくはないがね、正月につかうからし巻にはふつうカブを使うけど、その代りにこの大根を使うのだがね。安上がりだでのん。会社では町じゅうで六万貫ほど予定しているそうな」

という返事だった。爺さんはつづけた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

「こんなぐあいに金のもうかるチャンスがあったら、少しはインチキでも何でも、つかまえにゃ。だいたい、百姓だって、去年なら売上げの一〇〇万円、今年なら二〇〇万円くらいあげなくちゃ、一人前の百姓とはいえんでのん。一人前の百姓なら、麦と薯だけでなく、温室をやってすこしもうけにゃだめだぞね」

ふつうの温室では、電照菊の裏作としてつくっているメロンのシーズンがまさに終ろうとしている。そもそも渥美(あつみ)メロンはまずいという定評があるので、園芸試験場あたりでは、その改良にやっきになっている。今年は、試験場が積極的にのりだして、種子を一般温室にまで分配した。試験場でつくったメロンは、外皮にネットが縦横に張っていて、味もうまかった。が同じ種子からつくった一般温室産のメロンは、どうしてかネットが張らず、皮がつるつるで、味もまずかった。

温室はこの町に一千棟も建っている。がそのうち九〇パーセントは電照菊を産出し、残りのごく少数がトマトやキウリを栽培している。

だが中には、別のものをつくろうと野心にもえているものもいないではない。流行の観葉植物などをはじめるものが多くなったのもそのあらわれであろう。さっきの爺さんもその一人だ。

「おれのとこじゃ一二〇坪の温室全部、観葉植物をうえたぜ。町じゅうに千以上も建っとる温室がどれもこれも電照菊じゃ、曲がなさすぎる。菊が一ばん安全かもしれんが、人間はちっとは冒険せにゃの。ドラセナ、アナナス、インコ・アナナス、フィロデンドロン、サイクラメ

観葉植物の温室

ン何でも一通りそろえてあるが、一番多いのはゴムの木だわ。ゴムの木はふやすのにかんたんだあ、青いゴムの木なら、葉柄の下に抱いている芽と一しょに葉をちぎって挿木すれば活きついてしまう。だが斑入りのゴムはちょっと手間がかかる。安全かみそりの刃で枝の皮をむいて、水ごけを巻きつけておくと、傷口から根が出る。十分に発根したら切りとって植えればいい。おもしろいようにふやせるぜ。大阪の方からときどきブローカーがまわってくる。同じものが一万株以上そろっておれば、一貨車分になるで、現金で買っていくというのだが、このあたりは小規模で、一万株そろえておる温室なんてありゃせんわい。碧海郡には二万株三万株も栽培しとる業者がおるのに、こちらはみんな腹のちいさいやつばかりだでのう。

おれはパイナップルでも一もうけしたぜ。四

年前に豊橋の苗屋にパイナップルの苗が入ったちゅうで息子に買ってこいといいつけた。息子のばか、苗屋へいったら、一万円の苗と八千円のと二本あった。八千円の苗はものがわるいし、一万円じゃ手を出しかねると、買わずにもどって来おったで、おれは、若いもんが何をケチケチしとるだ、二千や三千ちがっても、ええやつを買ってこい、ともう一ぺん買いにやらせた。ところがパイナップルちゅうもんは、とてもうまくできとるだ。熟した実をとると、そのあとに芽がうじゃうじゃと伸びだす。その芽を一本々々切って挿木すると、みんなパイナップルの苗になるだ。今じゃ苗も四、五百円にさがったけど、それでも四年間に苗として八万円も売って、いま手持ちが二万円分もある。一万円が四年に一〇万円にばけちゃっただのう。そのうえ、今、パイナップルは熟しておる。熟したやつに砂糖をかけて食ったら、うまいぜ。とてもパイ罐の比じゃねえ。

これで味をしめて、バナナを植えたら、今年実ったけれど、すこし遅かったので、熟しそこなっちゃった。来年はバナナを成功させてみせるで、食いにおいで」

*

内海では小アジがとれる。表浜(太平洋沿岸)では中サバがひける。ぼてふりが「いきいきの小アジ、とれたての大サバはいらんか」と、どなって自転車を走らせていく。この月の晩のおかずは、小アジの酢のもの、サバの煮付けばかりである。腹痛が流行して医者が忙しくなる。

9月

一日。稲刈りは六〇パーセント終った。特殊早植が二、三年で普及してしまったのだ。田んぼに残っているのは、中手だけだが、それもすでに受粉しておもむろに色づくのを待っている。

早稲の米はまずいという評判だ。飯にたくと、こごめをたいたように、くちゃくちゃにくずれてしまうというのである。それは、真夏の烈日の直射でかわかすから、そうなるのだ。日陰でゆっくり干せば、むしろ今までの米よりうまいくらいだという人もいる。もともとこの辺りの米はうまくないのだが、腰のよわい、おかゆみたいな飯になってはこまるので、田んぼにハザを組んで、それにかけるのをやめて、家まではこんで、日の直射せぬ納屋や木立の蔭に掛けて乾燥させる。

それにしても早植になってから、米の収穫は目を見はるばかり激増した。品種もいいのだろうが、第一に、この地方は夕立が少なく、八月になると水不足をきたすのがつねである。そのために穂孕み前後の肥料が一こうきかなかった。ところ

が早植になると、肥(こえ)は水のたっぷりある六月七月に施されるために、十二分に効力を発揮する。だから今まで反収四俵という田が、早植に変ったばかりに、反収七俵という好成績をあげるようになった。

もっともいい例は、黄金田(こがねだ)である。黄金田というと名前はいいが、丘の垂り水を唯一の水源とする総計二町歩ばかりの田で、ふつうの年には、八月の照りで稲が枯死してしまうのがつねであった。ただ三年に一度か四年に一度、雨が多すぎて、他の田の稲がくさるような年だけ実った。「黄金田のとれる年は飢饉」といわれていたほどで、田の耕作者も三、四年に一度の収穫をたのみに耕作していた。戦前ですら一町歩で一〇俵という年貢の額からもいかにとれなかったかが推察されるであろう。ところが早植になっていらい、その黄金田も、一般の田と同じだけの収穫をあげるようになった。

稲束をはこぶのはオート三輪が多い。牛車の群れは堆肥を積んで畑へ向う。それはキャベツ畑をつくるためだ。

アワやキビも取り入れがはじまっているし、ゴマはまだ若いまま抜きとるか、きりとるかして、葉だけむしりとって、茎を干しておく。

そうして空いた畑では、夏のあいだにほしいままにはびこった雑草やキビガラ等を集めて焼く。上天気がつづくので、一日畑におけば、よく燃える。毎日あちらこちらに草を焼く煙がたなびく。まだ日中は暑くて働けぬので、午前四時に畑に出ている。夜明けに目をさますと窓の

外に草を焼く焔が立ちのぼっている。草焼きがおわると、牛が畑をおこす。二〇日も雨が降らず、照りつけつづけたので、大地はかちんかちんにこわばってしまった。牛すらあえぎながら鋤をひっぱっている。

キャベツはいよいよ本畑に植えるときだし、大根もまかねばならぬ。夏じゅうに用意した堆肥と「かんらん配合」「だいこん配合」とその用途で配合率を多少変えてある化合肥料を基肥にして畝がきられる。けれども雨が来ないのだ。土は焼けている。

「台風でも来なくちゃあかんかな」

と夕焼けを見ている。

しかしノリの立てこみも迫っている。いつ雨が降るやら、わからぬが、十日になると、大根まきとキャベツの植込みとで、畑は一ぺんににぎやかになる。

日照りつづきの畑をおこす

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton